

伝え合う力を高めるための国語科の授業づくり

～「話すこと・聞くこと」の単元における、対話スキルを取り入れた指導の工夫～

南城市立馬天小学校教諭 大城 こそえ

I テーマ設定の理由

SNSやスマートフォンの普及など、情報化社会の中で成長してきた子ども達は、コミュニケーションのツールとして携帯電話やタブレット等を使用することが多い。そのため、相手の顔を見て、思いや考えを伝え合う機会が少なくなっていると言われている。また、2019年度文部科学省が打ち出した「GIGAスクール構想」により、学校現場で児童1人1台ICT端末が整備された。それにより、今後各教科で情報を適切に活用して、調べたものをまとめたり発表したりする学習活動が増え、児童一人ひとりの「伝え合う力」が一層重要になると思われる。

小学校学習指導要領解説国語編（以下「解説国語編」と表記）では、国語科の目標である「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」として「日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。」ことを示している。さらにその中の「伝え合う力を高める」とは、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力を高めること」と定義しており、相手を意識しながら正確に聞いたり話したりする事が重視されている。

また、小学校学習指導要領解説総則編（以下「総則編」と表記）では、「児童生徒に目指す資質・能力を育むために『主体的な学び』、『対話的な学び』、『深い学び』の視点で授業改善を進める」と述べられており、他者と向き合い、相互交流を通して深め合い高め合う「対話的な学び」の視点からも国語科における「伝え合う力」が重要であると考えられる。

これまでの実践を振り返ると、国語の授業をはじめ様々な場面で「伝え合う力」を意識した交流活動を設定し、学習形態の工夫等を行ってきた。しかし、児童が「自分の考えを書いて、読み上げるだけ」になってしまったり、決まった子だけが質問をしたり等、交流に深まりが見られなかった。これは、活動の目的がはっきりと児童に伝わっていなかったり、伝える相手を意識したものになっていなかったりしたためと考える。さらに、教師の目指す、「児童の交流の姿」が曖昧で、児童に頷きや質問、メモの仕方などの基本的な「対話スキル」を意識して指導していなかった事にも課題があると思われる。

そこで本研究では、児童に伝える相手意識や活動の目的意識を持たせ、「対話スキル」を取り入れた言語活動を設定し指導を行う。また、3年生に「伝え合う力」を高める学習の手始めとして、必要なことを記録しながら聞く等、「話すこと・聞くこと」の領域で研究を進めていく。

このような指導の工夫を通して、児童の伝え合う力が高まるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

国語科の「話すこと・聞くこと」の単元において、「対話スキル」を取り入れた指導の工夫を行えば、児童の「伝え合う力」が高まるであろう。

III 研究内容

1 「伝え合う力」について

(1) 「伝え合う力」とは

小学校学習指導要領国語科では、「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」として、「日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」と示している。(資料1)。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

資料1 小学校学習指導要領国語科の目標

解説国語編では、「伝え合う力」とは「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力」と定義している。

また、本堂(2000)は、『『伝え合う』の『合う』を重視することによって、一方通行的な『伝達』とは異なって、相手の立場や気持ちを大切にし合う双方向的な『伝え合い』の意味を大切にしていかなければならない。』と述べ、「互いの立場や考えを尊重しながら言語で伝え合う能力の育成を重視して『伝え合う力を高める』こと」を位置付けている。

このことから、「伝え合う力」とは、話し手と聞き手が相手の立場や考えを尊重しながら、双方向的に自分の考えや気持ちを言葉で伝える力であると考えられる。

(2) 「伝え合う力が高まる」とは

小森(1999)は、伝え合う力を高めるために、五つの言語意識を子供たち(=学習者)の側から具体的に取り上げ、指導案に位置づけることを提案している。

小森の五つの言語意識をもとに、表1を作成した。

表1 五つの言語意識

表1から、伝え合う力を高めるためには、5つの言語意識の中で相手意識が他の4つの意識に影響していることが分かる。

また、「何のために伝え合うのか」という目的意識を持つことで、児童が言語活動のゴールを見通して学習することができる。

そこで本研究では、言語活動において児童に五つの言語意識の中でも特に「相手意識」と「目的意識」を持たせて、学習を進める。さらに、相手の話を的確に聞き取るための技能(具体的な姿や行動の形)を「チェック表」

1	自分にとっての相手意識
2	(1を受けた)目的意識
3	(1、2を受けた)場面や状況意識、条件意識
4	(1、2、3を受けた)相手や目的、場面や状況、条件などを考えたり、判断したりしながら、意図的・計画的に話したり、相手の話の意図や要点を的確に聞き取ったりするための方法や技能意識
5	(1、2、3、4を受けた)相手や目的、場面や状況、条件などを踏まえ、自分の言葉で意図的・計画的に表現したり理解したりする言語行為になっているか等を自己評価(相互評価も含む)する評価意識

にして子供達に事前に示し、自己評価を取り入れることで、伝え合う力を育てていく。

(3) 伝え合う力が高まる環境について

伝え合う力が高まるためには、その素地となる子供たちの関係が大切である。

植山・山本(2017)は、他者(相手)も自分も大切にしながら、協力して何かに取り組み、何かを成し遂げようとする「協同的關係」をつくるには、次の3つが大切であると述べている。

- ①安心感…教室の居心地がいい。黙って考えていても構わない。無用に競ったりせず、めいめいが自分のペースでその場にいることが認められている。
- ②仲間意識…ここにいてみんなと勉強するのが楽しい。何か役立ちたい。
- ③支持的風土…自分の話を先生やみんなが最後まで聞いてくれる。話したら反応を返してくれる。違う考えを言っても否定されず、お互いの考えを受け入れ合う関係ができています。

この協同的關係が作られている環境の中でこそ、「友達の考えが聞きたい」「友達に自分のことを話したい」という気持ちが生まれ、互いの立場や考えを尊重した「伝え合う力」が高まると考える。これは、国語の授業だけでなく、他の教科の授業や学級活動など、学校生活の様々な場面を活用した指導が必要である。

(4) 伝え合う力と「A話すこと・聞くこと」について

学習指導要領では、「思考力・判断力・表現力等」の「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の3領域において、学習過程を明確にし、各指導事項を位置づけている(表2)。

表2 第3学年及び第4学年「思考力・判断力・表現力等」A「話すこと・聞くこと」の指導事項

話すこと	話題の設定、情報の収集 内容の検討	ア 目的を意識して、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。
	構成の検討 考えの形成	イ 相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えること。
	表現・共有	ウ 話の中心や話す場面を意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫すること。
聞くこと	構造と内容の把握、精査・解釈、 考えの形成、共有	エ 必要なことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉え、自分の考えをもつこと。
話し合うこと	話し合いの進め方の検討 考えの形成、共有	オ 目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。

3領域の中でも、A「話すこと・聞くこと」は常に双方向的な学習であり、伝え合う力を育む基盤であると考えられる。

本研究で取り扱う単元は、「話し手が伝えたいことの中心を捉えるために、話の組み立て方を意識して、必要なことを記録しながら聞く」ことを目標に、メモを取りながら質問の答えを聞く言語活動を設定している。本研究の対象児童にとって「必要なことを記録しながら聞く」学習が初めてであることを考慮し、「聞くこと」に重点を置き、伝え合う力を高めていきたい。

2 「対話スキル」を取り入れた指導の工夫について

(1) 「対話スキル」の作成について

学習指導要領では、[知識及び技能](1)言葉の特徴や使い方に関する事項の中で、イ「相手を見て話したり聞いたりするとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話すこと」と示されている。また、解説国語編では「相手を見て話すことによって、聞き手の注意を喚起したり、話したことが聞き手に十分伝わっているかを判断したり、聞き手の反応を見ながら話したりすることができる。また、相手を見て聞くことによって、話を聞こうとする意志を示したり、同感や共感、疑問など、話に対する反応を話し手に示したりすることができる」と述べており、話すときも聞くときも、「相手を見る」ことが大切であることがわかる。さらに、『言葉の抑揚や強弱』とは、話す際の声の調子の上げ下げや強弱のことである。身振りや表情などとともに、話の伝わり方に大きな影響を与える要素である『間の取り方』は、話し手と聞き手の双方にとって重要である」として、「話すこと・聞くこと」には細かな技術があることが分かる。

村松(2013)は「話すこと・聞くこと」における指導について、『対話』学習には二通りの意味がある。一つは対話『を』学ぶ場である。もう一つは対話『で』学ぶ場合である。『を』の学習では、対話の方法や留意点など対話自体を学習対象とする。これは国語科の『話す・聞く』領域の責務である」と述べ、対話自体を指導する必要があると訴えている。

さらに堀(2003)は、『話すこと・聞くこと』の授業をするにあたってしなければならないことは、『話すこと・聞くこと』の領域で何を教えるのか、それを明らかにすることではないかと指導を明確化する必要があるとし、「話すこと・聞くこと」の基礎基本として5系列20の技術がある

としている。堀の5系列20の技術を表にまとめた(表3)。

この5系列20の技術と、学習指導要領「話すこと・聞くこと」の〔知識及び技能〕〔思考力、判断力、表現力等〕の内容を参考に、「話すこと・聞くこと」の言語技術を、低学年・中学年・高学年の3つに分けた。本研究では中学年のスキルを作成し、それを「対話スキル」として授業に取り入れていく(資料2)。

表3 「話す・聞く」5系列20の技術(抜粋)

基礎系列…「話すこと・聞くこと」のすべての前提となる基礎的な技術(態度も含む)
①姿勢…「安定した自然体」が安定した話力をつくる。 ②呼吸…たっぷり息を吸うことが「良い声」をつくる。 ③発声…一番後ろまで自分の声を届けることは最低限のマナーある。 ④口形…正しい口形が正しく明快な発音をつくる。
抑揚系列…話を1本調子にしないために声や速度に変化をつけて話す技術
⑤声量の大小…声量に変化をつけることにより、抑揚をつける。 ⑥声音の高低…声音に変化をつけることにより、抑揚をつける。 ⑦速度の緩急…速度に変化をつけることにより、抑揚をつける。 ⑧適切な間…随所に適切な間をとることにより、抑揚をつける。
構成系列…話をわかりやすくするために提示する順番を組み立て話す技術
⑨IBC ⑩ナンバリング ⑪ラベリング ⑫オリエンテーション
叙述系列…話のディテール(細部)を豊かにして話の説得力を高める技術
⑬エピソード ⑭データ ⑮オブジェクション ⑯ツール
聴衆系列…話し手と聞き手との心理的な距離感を近づけるための技術
⑰アイコンタクト ⑱ジェスチャー ⑲ダイアログ ⑳ユーモア

話すことのスキル(3, 4年)		聞くことのスキル(3, 4年)	
	話すことのスキル		聞くことのスキル
①	背すじをのばして(よいしせいで)	基礎①	① 話す人を見て
②	聞く人に体を向けて	基礎①	② よいしせいで
③	たっぷり息をすって	基礎②	③ メモを取りながら
④	相手に聞こえる声の大きさで	基礎③	④ えがおで
⑤	正しい口形で(口を大きく はっきりあけて)	基礎④	⑤ うなずきながら
⑥	ゆっくりと(いいスピードで)	抑揚⑦	⑥ 質問して
⑦	話すじゅんじょに気をつけて	構成⑩	
⑧	聞く人を見て	聴衆⑰	
⑨	えがおで	聴衆⑱	
⑩	質問されたら少しくわしく答えて	叙述⑮	

資料2 「対話スキル(中学年)」

(2) 「対話スキル」を取り入れた指導の工夫について

本研究では、単元の始めに児童に「対話スキル」の必要性を知らせ、児童と教師と一緒に「話すとき聞くときの対話スキル表」を作成する。その後、対話スキルが身につくように、短時間でできる簡単な「対話スキル」のトレーニング(5分間ミニゲーム)を毎時間取り入れ、児童が「対話スキル」を意識して活用できるようにする。

授業の最後の振り返りの場面では、対話スキルについて「スキルチェック表」をもとに毎時間自己評価を行い、「次回も対話スキルを活用したい」という意欲を持たせ、伝え合う力を高めていく。

IV 検証授業

- 1 単元名 「馬天っ子のキラリ」を伝えよう
- 2 教材名 メモを取りながら話を聞こう(東京書籍3年上)
- 3 単元設定の理由

(1) 教材観

本教材は、「話すこと・聞くこと」において「聞くこと」の系統に位置づけられる。児童はこれまで話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを、落とさずに集中して聞き取ることを学習してきた。これを踏まえ、本教材では、要点を落とさずにメモを取りながら話を聞いて、話し手が伝えたい事や自分が聞きたいことの内容を捉える事をねらいとしている。

また、メモを取りながら話を聞くのに重要なのが「必要な語句などの書き留め方を理解し、使うこと」である。メモを書き取るためには、重要な言葉が何かということ念頭に置きながら、話を聞く力が必要である。

本教材は、今後双方向的に自分の考えや気持ちを言葉で伝えたり、相手の話を聞いたりする際、大切な事を落とさないための方法（具体的なメモの取り方）を学習することから、伝え合う力を高めるために有効であると考えられる。

(2) 児童観

本学級の児童は、好奇心旺盛で、新しく始まった理科や社会の学習にも意欲的に取り組んでいる。また、朝の会では日直が1分間スピーチをしたり、帰りの会ではクイズをしたりするなど、国語の学習以外でも話したり聞いたりする活動を取り入れている。

「国語に関するアンケート」では、全体の83%の子が「国語が好き」と答えていて、「聞くこと」に関する項目を見てみると、「国語の授業で友達の考えを聞くことが大切だ」と95%の子が答えており、実際に友達の考えを「聞くこと」が好きで、聞きたいと思っている子も90%いることが分かった。

しかし、「話すこと」に関する項目では、「聞くこと」と同じように95%の子が「国語の授業で友達に自分の考えを伝えることが大切」と「話すこと」の重要性を感じながらも、実際に話すことが好きで「話したい」子は半数程度で、「話すこと」に抵抗があることが分かった。

また、「話を聞くときに大事なことはメモを取っている」子は71%、「メモを書くときに大事なことを知っている」と答えた子は62%で、メモを生活の中でうまく活用していない子が30%程度いることが分かった。

このことから、「友達が話をしっかり聞いてくれるから、自分の思いや考えをみんなに話したい」と思えるような、基礎的な対話スキルの指導や、大事なことを落とさないメモの取り方のコツを授業で取り入れ、「話すこと・聞くこと」の力を高めることが重要であると考えられる。

(3) 指導観

本単元では、「入学して間もない1年生」（相手）に、「コロナ禍でなかなか交流できない他の学年のお兄さん・お姉さんの素敵な所を伝える」（目的）ために、各学年の先生の話聞いて、大事なことはメモを取り、情報を集めるという、相手意識と目的意識がはっきりとした言語活動を設定した(表4)。

先生への質問事項はあらかじめ決まっておき、その答えを知ることが聞く目的となる。その際に、要点を的確につかむための手立てとしてメモを取る。ここで重要な事は、話の内容全てを機械的に記録するのではなく、速く簡潔にメモを取ることである。

そのために、まず教科書の教材を使って、実際に話を聞きながらメモを取り、メモを取るこのよさや難しさを体験させる。次に、教科書の教材を使い「まとまりがないメモ」と「まとまりごとに整理されたメモ」とを比較することで、話のまとまりごとにナンバリングを使うなど、わかりやすいメモの形を具体的につかませる。その後、学習したことを生かして、各学年の先生の話聞いて、大事なことを落とさないようにメモを取り、グループのみんなに「各学年の素敵どころ」を伝える。最後に、メモをもとにポスターと動画を作成し、「馬天っ子のキラリ」を1年生に伝える。

また本研究における「対話スキル」として、「中学年 聞くことのスキル③メモを取りながら聞く」の技術を単元全体を通して高めていく。さらに、「話すこと・聞くこと」の技術が、上達するために、毎時間授業の始めに「5分間ミニゲーム」を取り入れ、「対話スキル」を少しずつ身につけられるようにする。

これらの指導を通して、社会科や総合的な学習の時間で取材のためのインタビューをする場面、普段の授業で友達と対話する場面など、日常生活の様々な場面で伝え合う力が高まることを目指す。

表4 本単元における「五つの言語意識」の位置づけ

言語意識	子供の意識
1 相手意識	・他の学年の様子を知りたい1年生に
2 目的意識	・他の学年の素敵な所を知ってもらう
3 場面や状況 条件意識	・各学年の先生の話、メモを取りながら聞く。 ・聞いたことを、動画（発表）やポスターにして紹介する。
4 方法や技能意識	・メモをもとに、発表したりポスターを作成したりする。
5 評価意識	・大事な事を落とさずにメモする事ができたか。・1年生に他の学年の素敵な所を伝えられたか。

4 単元の指導目標

(1) 単元の目標

知識及び技能	○必要な語句などの書き留め方を理解し使うことができる。 〔(2) イ〕
思考力・判断力・表現力等	◎必要なことを記録しながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいこと の中心を捉えることができる。 [A (1) エ]
学びに向かう力、人間性等	○言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○必要な語句などの書き留め方を理解し、使っている。 〔(2) イ〕	◎必要なことを記録しながら聞き、話し手が伝えたいことや、自分が聞きたいこと の中心を捉えている。 [A (1) エ]	○進んで必要なことを記録しながら聞き、話し手が伝えたいことや、自分が聞きたいこと の中心を捉え、学習の見通しをもって伝えようとしている。

(3) 単元の指導計画・評価計画（全6時間）

時	◆学習活動 ○めあて	・指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1	◆「5分間ミニゲーム」をする。 ○学習の見通しをもち、話すとき・聞くときに大切なことを考えよう。 ◆「1年生に馬天小学校の素敵な所を伝える」という学習活動 についての見通しを持つ。 ◆これまでの経験から、人の話を聞くときや話すときに大切な事を考える。	①「相手を見て、話す・聞く（アイコンタクトゲーム）」 ・相手意識（1年生に伝える）と目的意識（各学年の良いところを伝える）をはっきりして、言語活動の見通しを持たせる。 ・これまでの経験をもとに「聞く時・話す時」のスキルを作る。	
2	◆「5分間ミニゲーム」をする。 ○今までに書いた「メモ」について、考えよう。 ◆これまでにメモを取った経験を振り返る。 ◆メモを取る ことのむずかしさと、メモを取ることのよさについて考える。	②「話を聞きながらうなずく（うなずきゲーム）」 ・これまでにメモを取った場面を想起させ、メモの必要性やよさ、難しさについて気づかせる。	[主体的に学習に取り組む態度] <u>観察・振り返りの記述</u> <u>メモ</u> ・進んで必要なことを記録しながら聞いているかの確認。
3	◆「5分間ミニゲーム」をする。 ○話を聞いてメモを取り、いいメモの取り方を考えよう。 ◆教科書の話例を、実際にメモを取りながら聞く。 ◆メモを取りながら話を聞いた感想を話し合う。 ◆教科書P52の2つのメモを比較させ下のメモの良い点を考える。 ◆「大事な事を落とさないメモのとり方」をまとめる。	③「メモを取りながら聞く（色いろメモ）」 ・教師 の話を聞いてメモをとり、教科書のメモと比べてみる。 ・教科書にある2つのメモを比較し、大事な事を落とさないメモの取り方について考える。	
4	◆「5分間ミニゲーム」をする。 ○メモを取る練習をしよう。 ◆前時の、「大事な事を落とさないメモの取り方」を確認する。 ◆教科書の話例を、メモを取りながら聞く。 ◆自分の書いたメモを振り返る。	④「メモを取りながら聞く（時間メモ）」 ・先生方に話を聞くことを目的にした、聞き方やメモの取り方を確認する。	[知識・技能] <u>メモ</u> ・必要な語句などの書き留め方を理解し、使っているかの確認。

<p>まとめ</p>	<p>7 今日の学習を振り返る。</p>  <p>スキルチェック表を記入する様子</p> <p>8 次時の予告をする。</p>	<p>○今日の学習を振り返る。(メモのコツを生かしてメモできたか)</p> <p>○「話すこと・聞くこと」のスキルができたか、チェックする。</p> <p>○各学年の素敵な所を、今日のメモをもとに、ポスターや映像にすることを伝える。</p>	<p>[思考・判断・表現]</p> <p>・必要なことを記録しながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいこと、中心を捉えているか。(観察・メモ)</p> <p>◆「聞くこと」のスキルを意識しているか。(振り返りの記述)</p>
------------	--	--	--

(4) 板書計画

<p>☆振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メモのコツを生かして、メモできたか。 ・スキルチェック表 	<p>○学習の手順</p> <ol style="list-style-type: none"> ①グループで、役割を分担する。 ②先生方の映像を見て、メモを取る。 ③グループのみんなに、各学年のすてきなところを伝える。 ④今日の学習をふり返る。 	<p>メモの取り方のコツ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○大事なこと(聞きたいこと)の答え)を書く。 ○短い言葉で書く。 ○かじよう書きで書く。 ○数字や矢印を使う。 	<p>めあて</p> <p>先生方に「各学年のすてきなところ」を聞いて、大事なことを落とさないようにメモを取ろう。</p>	<p>六月二十九日火曜日</p> <p>「馬天っ子のキラリ」を つたえよう</p>
---	---	---	---	---

V 研究の結果と考察

研究の考察は、検証前・検証後のアンケートや児童のノート記述、学習の振り返り、授業記録(写真やビデオを活用)をもとに行った。

1 対話スキルを取り入れた指導の工夫で、伝え合う力は高まったか

本研究で単元全体を通して高めていく「メモを取りながら聞く」ことのスキルについて、検証前・検証後のアンケートを比較した。

(1) アンケート①「大事なことはメモを取っているか」について

図1は、「話を聞くときに、大事なことはメモを取っているか」のアンケート結果である。検証前はメモを「とっている」「時々とっている」児童が71%であったが、検証後は95%と24ポイント増加した。メモを「とっていない」児童はいなくなり、児童は大事なことはメモを取るようになったといえる。

資料3は、児童Aのメモの変化である。児童Aは、第2時でメモに何を書けばよいか悩み、メモを取ることができなかった。しかし、第5時には、大事なことを落とさずにメモを取ることができていた。

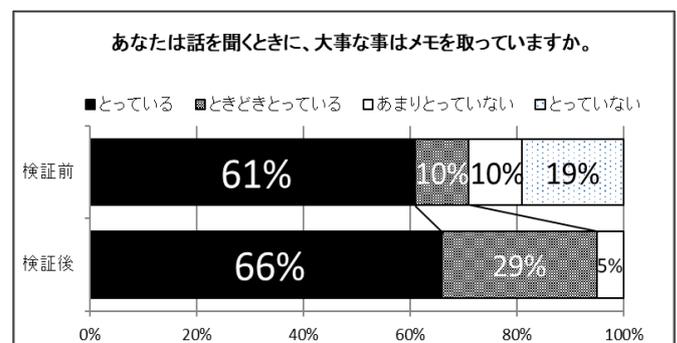
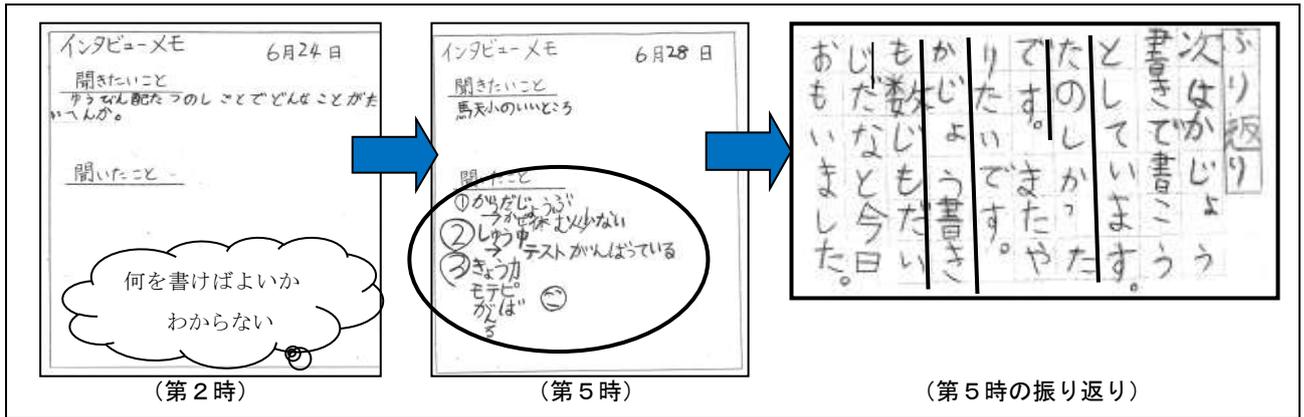


図1 メモを取ることにあつてのアンケート①

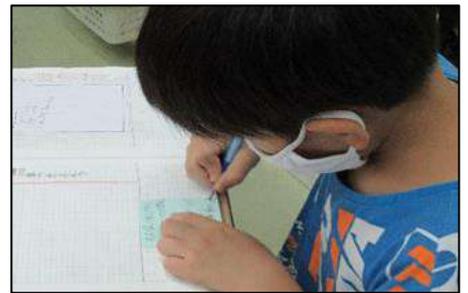


資料3 児童Aのメモの変化

児童Aのように、第2時にはメモが全く取れない児童が4人いたが、第5時には全員メモを取ることができるようになった。

これは、その日の授業の重点事項に関する対話スキルを取り入れた「5分間ミニゲーム」（内容は単元の指導計画を参照）を6回行ったことの効果であると考えられる。

このゲームの1回目は「アイコンタクトゲーム」、2回目は「うなずきゲーム」、3回目以降は、「メモを取りながら聞くゲーム」を行った。毎回児童の学校生活に密着したテーマ（色や時間、持ち物など）を決めて、メモを取った（資料4）。



資料4 メモを取る様子

5分間という短い時間で、集中して取り組めることもあり、初回はメモを取ることができなかった児童も、回を重ねるごとに大事なことを落とさずに、最後までメモを取れるようになった。

さらに、「話すとき聞くときの対話スキル表」と、「スキルチェック表」を作成し活用した。「話すとき聞くときの対話スキル表」は、単元の第1時に、「人の話を聞くときや話すときに、大切なこと」をクラス全体で話し合い、それを10項目にまとめたものである。毎時間の始めに、本時のめあてに応じて必要なスキルを「対話スキル表」で確認し、授業の最後には「スキルチェック表」をもとに、児童が自己評価を行った（資料5）。

(毎時間の始め)

(授業の最後)

① 相手の話をよく聞く	○
② うなずきながら聞く	△
③ メモを取りながら聞く	○
④ 最後までしっかりと聞く	○

(スキルチェック表)

馬天「子の「キラリ」をつた、名前)

★聞くときのスキル
 ① 相手の話をよく聞く
 ② うなずきながら聞く
 ③ メモを取りながら聞く
 ④ 最後までしっかりと聞く

6/21
6/

資料5 聞くときのスキルの確認とスキルチェック表（自己評価）

図2は、全児童の聞くときのスキルチェック表における、◎（できた）○（少しできた）△（できなかった）の数をまとめたものである。

単元の第3時には◎の数が44個であったが、単元の最後第6時には70個となり、26個増加した。一方で△は5個から1個に減った。このデータから、聞くことのスキル（「メモを取りながら聞く」を含む）ができるようになったと実感している児童が増えたことがわかる。

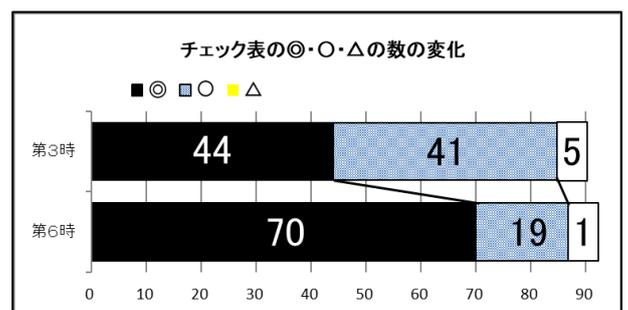


図2 スキルチェック表の◎・○・△の数の変化

(3) アンケート③「メモを取るのが好きか」について

図4は、「メモを取るのが好きですか」のアンケート結果である。検証前は「好き」「少し好き」と答えた児童が71%であったが、検証後は90%と19ポイント増加している。また、「嫌い」と答えた児童はいなくなった。このことから、ほとんどの児童がメモを取ることが好きになっているといえる。

これは、アンケート①、②の結果からもわかるように、本単元の学習でメモを取るときのコツがわかり、大事なことはメモを取ることができるようになったことで、児童に自信が付き、検証前よりメモを取ることが好きになったと考えられる。

単元の最後の第6時に、第5時でメモしたこと（馬天っ子の各学年の、キラリと光るいいところ）をまとめ、1年生に伝えるためにポスターを作成した（資料8）。

「1年生は、まだ平仮名しか習ってないから、漢字のところは読み仮名も書いた方がいいよね。」「1年生が喜びそうな絵も入れたら、もっと読みたくなるんじゃないかな。」といろいろなアイデアを伝え合いながら、うれしそうに取り組んでいた。そして、入学して間もない1年生に思いを巡らせながら、丁寧にポスターを仕上げ、単元の最後まで、相手意識や目的意識をもって活動していた。

そのポスターを掲示すると、1年生は興味津々な様子ですぐに集まってきた。ポスターを見た児童は、「1年生から6年生までのことが全部のっているね。3年生が、先生達に聞いて、書いたんだって。すごいね。」「ぼくのお兄ちゃんは4年生だよ。お掃除が上手って書いてある。」「1年生も5年生も、『元気がある』ところが同じだ。」と、習いたてのひらがなを1字1字指で追い、たくさんの「馬天っ子のキラリ」を友達とうれしそうに読む姿が見られた（資料9）。

このように、自分が取ったメモを生かして、「1年生に馬天っ子のキラリを伝える」という目的を達成したことにより、児童はメモの良さを実感し、メモが好きになったと推察される。

資料10の単元の最後の振り返りからも、メモの学習をしたことでメモが取れるようになったことはもちろん、メモしたことを生かして、1年生に「馬天っ子のキラリ」を伝えることができた喜びがわかる。

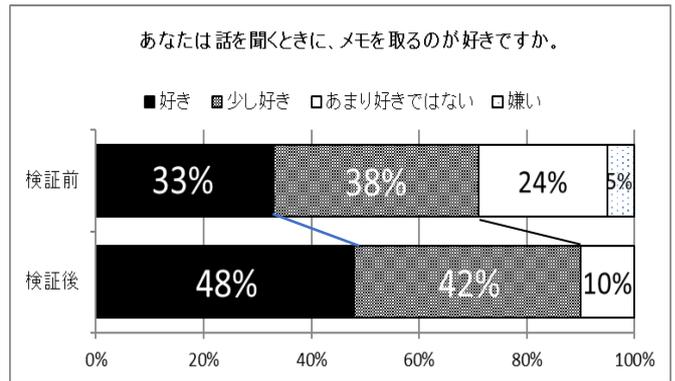


図4 メモを取ることについてのアンケート③



資料8 ポスターを作成している3年生



資料9 ポスターを見ている1年生

○いろいろな学年の、馬天っ子のキラリがわかりました。メモを最初はあまりできなかつたけど、どんどんメモを書く練習をして、メモが書けるようになりました。

○馬天っ子のキラリの勉強を、1年生に伝えられてよかった。メモをもっと使いたい。メモは書けるようになった。

資料 10 第6時（単元の最後）の振り返りから

これらのことから、本単元において、児童が最後まで相手意識と目的意識を持ち、学習を進めたことで、相手の立場を尊重しながら、自分の考えを伝える力が育まれたと推察される。

このような結果から、国語科の「話すこと・聞くこと」の単元において、「5分間ミニゲーム」を取り入れ、「話すとき・聞くときのスキルチェック表」を活用した自己評価、「メモを取りながら聞く」スキルなど、対話スキルを取り入れた指導の工夫を行ったことで、児童の伝え合う力が高まったと考える。

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 対話スキルを取り入れた5分間ミニゲームや、スキルチェック表（自己評価）を授業で取り入れることにより、児童が対話スキルの大切さを感じ、「話すこと・聞くこと」の対話スキルに対する意識化が図られた。
- (2) 児童がメモの良さを感じ、メモの取り方のコツを学んだことで、「メモを取りながら聞く」スキルが身についた。
- (3) 「話すこと・聞くこと」の単元において、対話スキルを取り入れ、最後まで相手意識と目的意識を持って学習を進めたことで、児童の伝え合う力が高まった。

2 今後の課題

- (1) 「話すこと・聞くこと」の指導事項である「話し合うこと」についても、対話スキルを取り入れ、双方向的に伝え合う力を高めていく。
- (2) 形式的な交流活動ではなく、児童が本音で伝え合い、語り合う、「対話」のある交流活動にするための、授業づくりの工夫が必要である。国語で高めた「対話力」を、他教科でも活かしていく。

〈主な参考文献〉

三好真史	『国語あそび 101』	学陽書房	2020年
文部科学省	『小学校学習指導要領解説 総則編』	東洋館出版社	2018年
文部科学省	『小学校学習指導要領解説 国語編』	東洋館出版社	2018年
植山俊宏・山元悦子	『話す・聞く 伝え合うコミュニケーション力』	東洋館出版社	2017年
花田修一 編著	『国語授業における「対話」学習の開発』	三省堂	2013年
堀 裕嗣	『発信型授業で「伝え合う力」を育てる』	明治図書出版	2005年
小森 茂	『「伝え合う力」の育成と音声言語の重視』	明治図書出版	1999年